

# 地球に棲む詩人たちを愛する

和合 亮一  
わごう しょういち

プロフィール  
1968年福島県生まれ。福島市在住。  
詩人。高校の国語教師。  
『AFETER』（思潮社）で中原中也賞を、  
『地球頭脳詩篇』（思潮社）で晩遊賞を受賞。  
2011年3月11日、伊達市にある学校  
で被災。避難所で数日過ごした後、ツイッ  
ターで詩「詩の襪」を発表し続け大反響  
を呼ぶ。近著『心に湯気をたてて』日  
本経済新聞出版社、『いきる（大人にな  
るまでに読みたい15歳の詩）』（ゆまに書房）  
などがある。

十数年前のことである。かつて中国の青海省にお  
いて、国際詩祭なるものが開かれた。私にとっては  
初めての海外旅行であり、見るもの聞くもの食べる  
もの、その全てが珍しかった。しかし最も興味深かつ  
たのは、各国から集まって来た代表詩人たちの姿で  
ある。日本の詩人しか知らなかった私は、他の国に  
も詩を書く者たちがそれぞれにきちんと存在してい  
ることに、強い感動を覚えた。

見るからに「詩人」という出で立ちの人物が居た。  
膝のあたりまで白い髭を伸ばしていて、仙人のよう  
な面持ちのご老人である。アルゼンチンで知らない  
人がいないぐらいの大詩人だとうかがったが、その  
姿のオーラに納得した。またアメリカやヨーロッパ  
の詩人たちは、とてもお洒落な恰好であった。日本  
代表として私も負けずに頑張ろうと（何を？）、気  
持ちだけでも張り切ったものだった。

研修旅行ということで黄河の源流を見に出かけた。  
バス十数台で連なって向かったのである。最初の数  
台は各国の代表者たちであり、その後続車は全て中  
国全土から集まった詩人たちであった。山から山の  
谷間を抜けながら、車の列の影を眺めて、詩人とは  
これほどまでにこの世界に存在するのだ（イヤ、実  
際はこの数十倍は全世界にいる）となんだか嬉しく

もため息をついてしまったのを今でも覚えている。  
帰り道に車内で、本日の晚餐に、各国で一人ずつ  
自作詩の朗読を披露して欲しいと言われて、私は手  
を挙げた。夕食を食べながら待った。しかし、いつ  
になっても朗読会の雰囲気にならないので、中止に  
なったのだろうとリラククスして酒杯を空けていた  
ところ、スタッフの方に肩を叩かれた。

案内されるまま会場へ。舞台はタキシードを着た  
司会者とオーケストラ、そして千人近くの青海省  
に暮らすお客さんで埋め尽くされていた。呆気にと  
られながら、私は三番目に日本語で朗読。アルコー  
ルの勢いも手伝って、いつもよりもエキサイトし絶  
叫してしまった。拍手をいただいた。地球に棲む数  
多くの詩人たちと埋め尽くした聴衆の影を眺めて、  
酔った頭で大げさにはつきりと分かったのだった。

こんなにも世界は、詩を、言葉を、そして、詩人  
を求めているのだ。あらゆる言語が世界中にあった  
としても、それがあれば、詩は必ず生まれ続ける、  
詩人はあり続ける。

その後も世界を幾度か旅した。異郷の詩人たちと  
の出会いを重ねる度にやはり直感するのだ。言葉が  
ある限り、そこに宿るのが詩なのだ。そこに絶対に  
生まれる何かこそが、それそのものなのだ、と。

月刊  
**みんぱく**  
3月号目次

1 エッセイ 千字文  
地球に棲む詩人たちを愛する  
和合 亮一

2 特集  
夢か、うつつか

- 2 夢をみる／夢をかく 荒木 浩
- 4 夢と心理学——夢は合わせから 河東 仁
- 6 見たい夢・見たくない夢 木村 朗子
- 7 インド、移動民社会の夢見 岩谷 彩子
- 8 脳の信号から夢を可視化する 神谷 之康

10 似たモノさがし  
ドリーム・タイム  
山中 由里子

12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行  
未来世紀のミュージアム  
野林 厚志

16 多文化をあきなう  
さをり織りで、記憶を紡ぐ、歴史を紡ぐ  
東山 高志

18 フィールドで考える・退官寄稿  
パゴダと軍事の国にあって  
田村 克己

20 人間学のキーワード  
贈与  
岸上 伸啓

21 異聞逸聞  
モノグラム美術  
岡本 光博

22 制服の世界、世界の制服  
一九八二——民主化にゆれた韓国の学生服  
太田 心平

24 次号予告・編集後記